各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。
彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生のビジョンを抱いているのか？
HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介しています。
第8回は、広告代理店株式会社朝日エル代表取締役である中村（山本）和代さんにご登場いただきました。
聞き手は、編集委員、社会学研究科の足羽與志子です。

自分たちが「良い」と思うことをする。それが仕事を続ける原動力。それが不思議にビジネスになる。

女性だけのマーケティングチームに参加、女性向け商品の企画・広告に携わる

足羽　こんにちは。中村さんは広告業界で長く働いてこられましたが、この仕事は学生時代から決めていらしたのですか。

中村　実は、就職はかなりいい加減で、男女同一賃金と週休2日制を条件にしたくらいでした（笑）。当時は、どちらも実施している企業が少ない上に、大学に求人がきたところだけしか見なかったので、受けたのは今の会社の関連会社である朝日広告社を含めて3社だけでした。

足羽　80年入社ですと、女性の総合職自体がまだ少なかったでしょう。

中村　私たちが女性総合職の一期生でした。その翌年、女性だけのマーケティングチームが発足し、異動しました。このチームが今の朝日エルの母体になっています。当時は女性向きの商品でも、男性が商品開発をするのが当たり前でした。その流れを変えよう、女性向きの商品は女性に任せようと、ある意味で戦略的に生まれたチームでした。朝日広告社の当時のトップがフェミニストであったことも大きな要因です。

足羽　当時としては確かに革新的試みですね。変革にはいつもトップの人格と先見性は大きな味方ですね。ところでこの頃は、女性に「女性」を演出させて商品化するといった方向性に疑問もあがっていますが、それには違和感はありませんでしたか？

中村　若かったせいか、そういうことは考えませんでした。女性の意見を聞きながら新しい商品づくり、販促策に関わること自体がとにかく楽しかった。化粧品や家電製品の仕事に没頭していました。

同期の女性を乳がんで失ったことが、女性医療への執着につながっている

足羽　現在、大きなテーマの一つとされている、女性と医療に関わる仕事はどういうキッカケで始められたのですか。

中村（山本）和代（なかむら・かずよ）
株式会社朝日エル　代表取締役
1958年生まれ。1980年、法学部卒。株式会社朝日広告社入社。
翌年社内にできた女性だけのマーケティング・広告・宣伝チームに参加し、
それが1986年株式会社朝日エルとなる。
2005年、代表取締役のひとりに就任、現在に至る。
朝日エルホームページ：http://www.ellesnet.co.jp/home/

中村　「日本の女性医療は遅れている。まず私たち女性専門家が立ち上がらないと」と、産婦人科医と医療ジャーナリストの二人の女性が当社にかけこんできたのが97年のことです。共感して事務局を引き受け、海外から各分野の第一人者を招いたシンポジウムや専門家のための勉強会を開催し、アドボカシー活動も積極的に展開しました。その活動の中で出会った、乳がんの専門医が洩らしたのが「長く多くの患者さんを診てきたのに救えなかった人があまりにも多い。早期発見だったら助かるのに、すごく空しい。これからは啓発活動に生涯を捧げたい」という言葉でした。同期入社の女性が乳がんの発見が遅れたために35歳の若さで亡くなってしまったことへの思いもあって、アメリカで始まっていた乳がんの早期発見キャンペーン、「ピンクリボン運動」を日本で立ち上げることになりました。

始めてから８年以上。今では女性医療の状況はかなりよくなりましたが、それでもまだ問題はたくさんあります。私はジェンダー・フリー推進派ですが、医療に関しては、もっと生理的性差や社会的性差にセンシティブであってほしい、と思っています。

足羽　産婦人科の診療もそうですね。日本では患部の診療の時、診察台に横になったあと、カーテンで患者の腹部の上あたりを仕切って医師と患者が顔を会わせないようにするでしょう。そうしてほしいと思う患者もいれば、なんだかモノのように扱われてイヤと感じる患者もいます。欧米では、医師は患者さんの目を見てキチンとコミュニケーションを取りながら診察をつづけるのが普通です。女性の身体は初経、成熟期、更年期とひとつづきであり、かつ変化している。専門家にそこを一貫して診てもらう仕組みが必要でしょうね。

中村　産婦人科医が女性の「生涯の主治医」となることが一番いい、と思っています。月経不順や子宮内膜症、妊娠・出産・不妊、性感染症や婦人科がんなど、一生の間に女性にはいろいろ健康問題があります。更年期の影響も意外に大きい。私自身、２～３年前イライラがひどい時期がありました。更年期についてよく知っていたので、「きたきた！」とばかり主治医の産婦人科医を訪ねホルモン値を計ってみたら激減していました。ホルモン補充療法を始めたら、２～３カ月で症状がなくなり、「これで仕事もできる」とホッとしました。更年期以降は、骨や筋肉が急速に衰え、それが女性の健康寿命を短くする、ともいわれています。女性が安心して掛かれる主治医や医療システムは必要だと思います。

自分たちが「良い」と思うことを仕事にすれば必ずビジネスになる

足羽　中村さんたちのお仕事は自分たちの思いと、社会に役立っていくことを非常にうまく融合させていますね。でも、ビジネスの観点で見ると、こうした仕事をきちんと採算ベースに乗せ、利益を出していくのは難しいように思うのですが。

中村　そんなことはありません。女性チームのときからのリーダーで、長く代表取締役を務める岡山の信念は、「自分たちが『良い』と思ったことを仕事にする。『良い』仕事は必ずビジネスになる」というものです。やっているうちにテーマに賛同する企業が出てきて、ビジネスとしても成立するようになる。逆に、私たちが「良い」と思わなかったから、依頼されてもたばこの広告宣伝には関わりませんでした。短期的な利益でみればビジネスチャンスを逃したことになるのでしょうが、企業イメージの面から考えたら決してマイナスではないと思っています。

足羽　人間として何が大事なのか、何がいま社会に必要で、これからどうしていったらいいのか、という日常生活での問題は、実際にその場にいて生活を動かしている人でなければ、切実な実践的感覚としてわかりませんね。一般的にいって女性は出産や育児、介護と、人間の生から死までに関わる機会が多い。女性には社会的性差による不自由さがありますが、同時に、人の生や死を知る「人間」としての豊かな経験に恵まれているともいえる。そうした女性の視点が結局は、人間としての視線に通じる、というそのリアリティが中村さんの仕事に活かされている。「良い」と思うことを積極的にやっていかれる姿勢は、会社を独立させたときからでしょうか。

中村　そうですね。朝日広告社は働きやすい会社でしたが、大きな組織ですから、どうしても小回りが利きにくいところがあります。女性が働きやすいように、もっと自由度の高い会社にしようと、86年に朝日広告社から独立しました。ちょうど私を含めて２人が妊娠中で、母乳で育てたかったので、私は一年間の休業を申請し、認めてもらうこ

足羽與志子
（あしわ・よしこ）
社会学研究科教授

朝日エルが手がける、乳がんの早期発見を促す「ピンクリボン運動」のバッジ

とができました。

足羽　育児休業の法定化前ですね。ところで、日本の社会は最初のとっかかりは遅いのですが、あるところまで行くと急速に動きますね。「良い」と思うことを仕事にしていく、というのは仕事をする人の夢ですが、中村さんは、現にビジネスとして成功しておられる。その要因は？

中村　「良い」と思ったことを進めていくと、必ず素晴らしい同志に出会う。良い方々に恵まれたことが何よりの成功の秘訣だと思います。採算ぬきで一つの仕事をすると、私たちの目指す方向性や姿勢を外に示すことにもなり、また別の仕事の依頼が来る。そこで採算がとれてきます。この仕事には社会に一つの動きを作り出すその下準備をするような楽しみがあります。

足羽　いま、日本発のコンセプトが世界の意識やスタイルを大きく変えるのではないか、日本から何かがでてくる、という世界からの期待は、とても大きいと感じます。政治だけでなくソフト・パワーの領域でも、世界が「アメリカ」というブランドに疑問をもち、単純には飛びつかなくなってきている。日本の職人さんや技術者、一人でも好きだからやっている小さな企画や運動、というような潜在的資源のなかから「よし」というものを世界の方向へとつなげていくことも可能なのでは？ 中村さんはどうごらんになりますか？

中村　確かに日本の潜在的資源が素晴らしいことはアメリカなども認めるところです。私たちが一昨年からテーマとして追いかけている「サステイナブル・ビジネス（地球環境と地域に貢献し、しかも企業に利潤をもたらすビジネス）」の分野でも、環境に関する技術力では日本はすごい、と言われています。ただ、アピールが下手だったり、自分たちの先進性に気づいていないケースが多いように思います。これからは概念とノウハウの共有化をグローバルに進め、日本が「サステイナブル・ビジネスのお手本」とみなされる世界を作りたいと思っています。

　また、「食」の分野でも日本はリーダーシップをとっていけるのではないかと考えています。米と野菜と大豆と魚がつくりだしてきた伝統的な健康食・日本食のよさを、もっと世界に発信していきたいですね。

足羽　本来の食を考えることで、ビジネスにもなり、かつ自然や教育、労働、流通システムから政治まで捉え直すきっかけとなりうる。まさにそうですね。いま、他に力を入れていることは？

中村　一つは、「ＳＩＦＥ（Students in Free Enterprise）」のサポート、もう一つは障害をもつ方々への支援です。ＳＩＦＥは学生のフレッシュな感覚を活かした地域貢献型ビジネスの、大学対抗のコンテストです。75年にアメリカで生まれ、今では世界48カ国、1800校が参加している。実際に事業化されたものもあるのに、日本ではまだほとんど知られていません。後者は昨年、神戸を本拠地とする「楽団あぶあぶあ＆ミュージカルチームLOVE」の初めての東京公演をサポートし、観客も私たち自身も大感動しました。来年６月に第２回を計画しています。この12月には国の障害者週間に合わせて、民間のリンクアップ事業「ペパーミント・ウェーブ」キャンペーンを始動します。「隣の人の不自由さを、あなたが少し、支える。あなたの不自由さを、隣の人に少し、支えてもらう」をキャッチフレーズに、障害をもつ人・もたない人の境目を少しだけ埋めていきたいと考えています。

足羽　ご自分の今後にどんなプランを描かれていますか。

中村　趣味と仕事の境目がありませんから、目の前にあるやりたいことをやっていく、と思います。最近では、「介護の日」を作ってしまいましたし（笑）。私は、自分は100歳まで生きると勝手に思っているので、ある程度の年齢まで仕事をしていかないと社会に対して申し訳ないかなという気持ちもあります。かつて若い男性社員に「中村さんはお仕事マシーン」と言われたくらい、時間的にはハードですが、楽しいことのほうが多いのでしょうね。会社が儲かっても、世の中が良くならないと何もならないし、地球全体がハッピーにならなくては自分自身もハッピーになれない、とはいつも思っています。

足羽　まったく同感です。

中村　とにかくハッピーになる方向へと、明るくがんばっていきたいですね。

対談を終えて

　米国の二度の大統領選挙でみせた選挙対策顧問のカール・ローブの卓越した戦略は「short and sweet」、簡単なイメージ語句を一方的に繰り返し、対話はしない。この手法が日本や世界の力の政治舞台に広まりつつある昨今。しかし中村さんが手がける情報の世界はこれとは異なる。普通の人のささやかな、言葉にならない、けれどかけがえのない思いこそ、社会に伝え分かち合いたい！理想主義のプラグマティックな実践者といったらよいでしょうか。

　私の担当は今回で終了します。対談でお会いした皆さんは、既存の原則に縛られず、一人でも集団でも自在に行動してこられた方ばかり。まず皆さん、人としての驚くほどの率直さと情熱をお持ちでした。加えて、柔らかさ、粘り強さ、いさぎよさ、そして人と共に生きていくことへの強い責任感とユーモア。ここでご紹介できなかった方々も含めて一橋のすべての女性の熱いマグマに触れた思いでした。

（足羽與志子）